公益財団法人 美作学術文化振興財団

作州路 Vol.22 2019/3

1798（寛政 10）年 9 月、和算の大家 木村軍太忠雄（きむら・ぐんた ただかつ）は、勝南郡岡村（現在の岡山県勝田郡勝央町岡地区）の地形を写した『作品勝南郡岡村絵図』を作成した。畳二帖分ほどの大きさがあり、土地の用途によって鮮やかに彩色された大変に美しい地図である。現在、岡地区の旧家で軍太の係累である青井家で大切に保管されている。江戸末期の岡の様子を知る大変に貴重な資料である。

1800（寛政 12）年、伊能忠敬が、『大日本沿海輿地全図』を測量し始める、実に 2 年前のことである。

※現代のように地図の北を上にすると配置はこの向きとなりますが、『作品勝南郡岡村絵図』のタイトルから「東」と書かれた方が本図の上と考えられるため、本紙タイトルを本図上の向きあわせて配置しました。どうぞご了承ください。（当財団ＷＥＢにカラー掲載しています。）

―文化の薫る活力ある地域づくりをめざして―　財団では、このような事業を行っています。

普及啓発事業

1. 財団ニュース「作州路」22号の発行

2. 普及講座の開催

「箔を使ったしおり作り」
講　師／稲岡 篤
期　日／平成 31 年 2 月 10 日（日）
会　場／勝央美術文学館

「箔を使ったしおり作り」の様子

3. 事業協賛に伴うＰＲ活動
「金時祭花火大会」への協賛

芸術文化活動事業

【主催事業】
■公募展の開催
○第 15 回ミマサカコドモ絵画展
会　期／平成 31 年 1 月 6 日
～平成 31 年 1 月 27 日
会　場／勝央美術文学館
展示室・町民ギャラリー 1・2

「ミマサカコドモ絵画展」会場風景

■作品展の開催
○gallery exhibition vol.31
稲岡篤　岡田直子　矢内早由紀　作品展
会　期／平成 31 年 2 月 10 日
～平成 31 年 3 月 10 日
会　場／勝央美術文学館
町民ギャラリー 1

「稲岡篤・岡田直子・矢内早由紀作品展」会場風景

■イベントの開催
○岡本綺堂没後 80 年岡本経一生誕 110 年記念
合同リーディング公演　往来 ～綺堂・ホームズ・師走・新年。～
日　時／平成 31 年 3 月 31 日
午後 1 時開場　午後 1 時半開演
会　場／勝央美術文学館
特別展示室
出　演／株式劇団マエカブ、Unit out

【共催事業】
■公演の開催
○舞踊集団菊の会公演「日本のおどり–錦秋に舞う」
と　き／平成 30 年 11 月 18 日
会　場／勝央文化ホール

■特別展の開催
○文豪からの手紙　芥川龍之介と木村毅

■企画展の開催
《文学》
○小企画 37「勝央文学散歩」〈第Ⅰ期〉〈第Ⅱ期〉
《美術》
○コレクション展 vol.39 郷土の画家シリーズ
〈第Ⅰ期〉「桜満ちて牛嘶くか」
〈第Ⅱ期〉「光る森、夏はじまる。」

【助成事業】
文豪からの手紙　芥川龍之介と木村毅
勝央金時太鼓保存会活動
勝央町文化協会活動事業

【後援事業】
The Parrots Live 2018 in Shoo
童謡 100 年「みんなのうたコンサート」
～こころの童謡　ふるさとの歌～
乗松恵美 & 泊真美子ジョイントコンサート

その他の事業

1. 文化財資料収集保存事業
2. 学術的研究及び図書の発刊事業への
助成事業を継続しておこなっております。

地域の文化活動を応援します！

地域芸術文化振興のための助成活動を実施しております。詳しい内容は、財団事務局へお尋ねください。

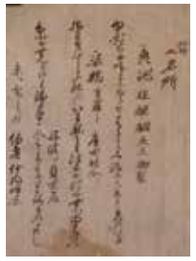
当財団への皆様の貴重なご寄付をお待ちしております！

当財団への皆様のご寄付は、地域文化事業の実施に役立てられています。
ご寄付をいただいた皆様は、税額控除をうけることが出来ます。

表紙写真について【木村軍太忠雄作『作品勝南郡岡村絵図』】

本図は、1798（寛政 10）年、江戸末期に、現在の岡山県勝央町勝央町活躍した和算の大家 木村軍太忠雄（きむら・ぐんたただかつ）によって制作された地区の絵図（地図）である。地名のほか施設なども詳しく記されている。余白部分には、地区の名所に関する古歌も付記されており、現在は姿を消した轟池や、現在の中国自動車道やファーマーズマーケットノースビレッジのあたりを通っていた旧街道も見ることが出来る。

（右図は、名所に関する古歌の一部）



編集後記

本紙にご寄稿いただいた、木村泰二先生のご紹介で表紙掲載のため、青井泰憲様に『作品勝南郡岡村絵図』をお持ちいただき、貴重な絵図を直に拝見することが出来ました。200 年以上も前に描かれたものとは思えないくらい当時の彩色がしっかり残っており、作者の懸命な思いや、大切に受け継いでこられた、木村・青井ご両家の先祖の歴史を大切に守り抜くご努力に、頭が下がるばかりでした。改めて木村泰二先生、青井泰憲様にこの場お借りして心より感謝申し上げます（E.N）

公益財団法人　美作学術文化振興財団
〒709-4316 岡山県勝田郡勝央町勝間田207-4　Tel. 0868-38-0270 ／ Fax. 0868-38-0260

発行日：2019 年 3 月 31 日
編集・発行：公益財団法人美作学術文化振興財団
印刷：友野印刷株式会社

木村軍太忠雄 ー 後世に残したもの ー

木村泰二（岡）

◎江戸期の岡村と勝間田村

岡村は古くから畿内と出雲を結ぶ出雲街道が走っており、後鳥羽上皇・後醍醐天皇配流の道ともなった。江戸期には参勤交代のルートとして整備され、各藩のみならず民衆の伊勢・出雲大社などへの参詣路として賑わった。そのため、多くの史跡や伝説が残されている。

西隣の勝間田村は美作津山藩侯森忠政が入国した 1603 年（慶長 8 年）の頃、中河原という荒地が広がっていた。津山藩の奨励もあり、下山和十郎は中河原を開拓し、上流に堰を作り、耕地とする事業を完工した。その後、下山家は津山藩の本陣を勤めるようになった。

一方、木村治右衛門は中河原の東を開拓し、津山藩侯から大庄屋に選任され、後には出雲藩、勝山藩の本陣をも勤めるようになった。木村家の系図によると、木村治右衛門宣兼が当主の時、彼の二男が「勝南郡岡村に田畑、山林多有之勝間田村与里元禄年中仁岡村仁引越す」とあるように記されている。これにより、勝間田村木村家から分家し、岡村の木村家を創設した。やがて、岡村でも大地主として代々村役人を勤めるようになっていた。

1697 年（元禄 10 年）津山藩が断絶となり、勝間田村は甲府領となったが、領主は木村瀬左衛門に大庄屋を託した。1747 年（延享４年）岡村を含む勝南郡八ヶ村は但馬出石藩領となった。出石藩侯仙石政辰（まさとき）は廨舎（かいしゃ）を置かず、岡村青井平内忠広と妙見村古田次郎兵衛を大庄屋に選任し、直接管理を命じた。この岡村青井平内忠広の子が、青井郡太である。　※廨舎･･･代官所

◎木村軍太忠雄の生い立ち

1913 年（大正 2 年）発刊の新訂訳文作陽誌に「岡村青井郡太という者、仙石候の大里正たり、宝暦、明和、安永の頃郡太算勘に委（くわ）しく」とある。また、1927 年（昭和 2 年）発刊の勝間田町誌にも「木村家は元禄年間勝間田村より移り、軍太は其裔（えい）なり、幼より文武に志し殊に算学に精通し、且つ小笠原流の諸禮の奥義を極め」とある。

「作陽誌」に出てくる青井郡太と「勝間田町誌」に出ている軍太は、同一人物である。青井郡太は岡村木村家から婿養子に懇望され、木村軍太忠雄と名乗ったのである。

庄屋は村の最高責任者として権限を与え、領主が任命するという制度であった。村では庄屋を中心に年貢徴収の監督を始め、治安の維持、農耕の指導などの村政全般に及ぶ広範な権限を持っていた。それには、高い計算能力や書類作成能力を持った人材が必要で、熱心に子どもたちを教育していた。この地域は学問への環境にも恵まれていた。元禄初年には隣村の黒土村に神崎又市の寺子屋があり、寛政年間には同じく黒土村の広瀬治郎右衛門が、付近の子弟に読み書き算法を教えていた。また、勝間田村の医業山田家は数代にわたり、この地域の子弟に学術を授けていた。

軍太は庄屋の環境の中で育ち、当然学問を身につけなければならない立場であった。また、生家をはじめ縁戚関係を持った家々は富裕層に属していた。そのため、少年期には将来を見越した学識を伝授されていたと思われる。土地柄も開拓の歴史もあり、測量や土木工事への見識も高く、和算への関心も寄せられていた。軍太はこの環境のもとにあって、後々まで、村の運営全般に深くかかわっていた。

◎和算の大家

木村軍太忠雄については、本邦算者原譜の巻に「日本に当時としては算学に精通し、和算史に著名な和算の大家」とある。

和算といえば江戸時代の関孝和があげられる。孝和は「塵劫記（じんごうき）」で算盤を独習し、和漢の数学書を次々に解いていくことによって、その学力を増進させた。次々と門人を養成し、和算は盛んとなっていく中で、円周率、曲線、図形の面積や曲面に囲まれた立体の体積を求めることなど独特の方法を創った。

軍太は当時の和算に刺激され、生来の能力とあいまって独自で精進し、この地域で和算の声望を高めていき、身分にかかわらず多くの門人を持つようになった。

田熊村（津山市田熊）の中村周介は医業と和算を修めていた。彼は医業を継ぐかたわら多数の和算での門人を持っていた。時に、加茂川用水口から洪水をなくするよう、当時の代官により相談を受けていた。それを解決するには、暗渠（あんきょ）用水を設ける必要があった。彼はそれに応えて、1822 年（文政 5 年）大隧道を完成させ、洪水からの災害を守ることができるようになった。軍太はこの偉業を達成した中村周介に、1784 年（天明 4 年）頃から測量を伝授していた。このように農村で和算が実際の生活の中で役立ったのは、数学、租税、土木水利工事、測量などであった。

勝間田村の「平島豊八定光は幼少より学をよくし、殊に数学に長じ、岡村在住の木村軍太忠雄に師事して数学を学び、1802 年（享和 2 年）8 月、師より算術の免許皆伝書を受けた」と門人たちが建立した碑の裏側に書かれている。

①門人が建立した平島豊八定光先生の碑

彼は免許皆伝を受けた後、多くの門人に数学を教え、1850 年（嘉永 3 年）66 歳で逝去した。1858 年（安政 5 年）に門人たちは算術定光先生と正面に大書した碑を建立した。

彼は 7 歳頃から数学を好み、軍太のもとに通い、17 歳で免許を得た。次に掲げるのは、数学の師、木村軍太忠雄より伝授された算術免許皆伝書の一部である。

②算術免許皆伝の終わりの部分

◎岡村絵地図の作成

江戸時代には人や物資が全国規模で動き回る社会となっていたため、幕府は支配を徹底することで、全国 60 余州の国単位で境界や街道、村の所在などを記した国絵図を作成させていた。村政を預かる庄屋としても、村方の境や用水路などを示した絵地図が必要であった。

軍太は 1798 年（寛政 10 年）9 月、岡村の絵地図を作成している。畳２帖分の大きさで、着色、境界、道路、河川、田畑、山林などが詳細に描かれており、現状と全く変わりのない正確なものである。

民家の点在する中で、そこかしこに史跡が記入され、いかにものどかな田園地帯の風景が浮んでくるようである。絵図の四隅には方位が記され、村の周囲には隣接する村々の名前が入れてある。また、絵図の余白部分には史跡、後醍醐天皇の御製、勝間田池、轟池などに関する古歌が所せましと書かれている。

この絵地図を作成する上で、寛蔵なる者の手伝いを受けて作成したと銘記してある。

③余白に書かれている古歌

④軍太・寛蔵と記名

◎剣道の大家

勝間田町誌にも書かれているように、軍太は小笠原流の諸礼の奥義を極めており、剣法、兵書にも通じていた。自ら各地を巡遊し、技を磨き、他流試合も多く経験していたため、その名声は高いものがあった。

小笠原流は武家礼式の一流派で、元来弓馬の術を伝え南北朝時代に小笠原貞宗のような名手が出て、やがてそれが武家の礼式として大成した。江戸時代に幕府に仕えて、弓馬の師範礼法、儀式全般をつかさどったため、幕府の権威ある礼法となった。

庄屋は本来農民であり、藩権力の支配を受ける立場であるが、反面藩権力支配の末端に位置して、農民支配を行うという二重性格を持っていた。軍太は農民の日常生活の監督、簡単な事件の裁定など、村の治安維持にも精力的にかかわっていた。しかし、領主は清貧に甘んじて民衆の生活を支えるべきであるのに、民衆から高い年貢を取り立て、生活を脅かすことが多かった。凶作、飢饉の年は農民の生活は困窮しているにもかかわらず、領主の年貢取り立ては厳しかった。農民としては年貢の減免や救済を求めるが、聞き入れられず武装蜂起へとエスカレートしていった。

軍太は幼いころから生家の家門に一揆と思われる刀の傷を見たり、当時の治安状態について聞かされていた。村政にたずさわる者として、地域が平穏で皆が幸せに暮らすことが彼の使命であると考えていた。そのための資質として自分自身が人間的にも人々から敬愛の念を持たれ、信頼されることが必要であると思っていた。このことから武家の礼法の上に剣術の会得に励んだと思われる。

以上のように木村軍太忠雄には、村の人々が互いに支えあって生きるために己の誠を尽くしたいという思いがあった。そのため広く教養を伝授していたのである。和算の大家として、絵師として、剣術家として、その名を後世に残した有能な人物であった。

⑤一揆の刀傷のあった家門

■参考文献
表紙：勝南郡岡村絵図 (寛政 10 年)
算術免許皆伝書 (享和 2 年)　勝間田町誌 (昭和 2 年)
美作古城史 (昭和 33 年)　新訂訳文作陽誌 (昭和 38 年)
平島家系譜探訪　木村家累代霊位 (過去帳)